

# 周山城跡

## —明智光秀が築いた山城—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

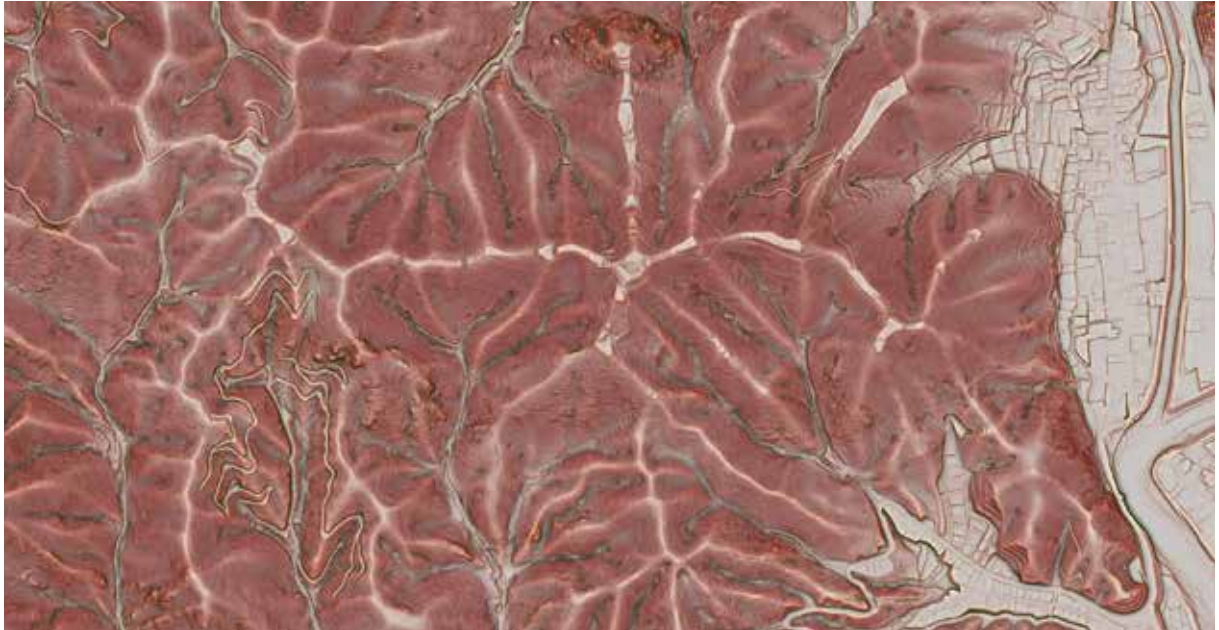


図1 周山城跡赤色立体地図

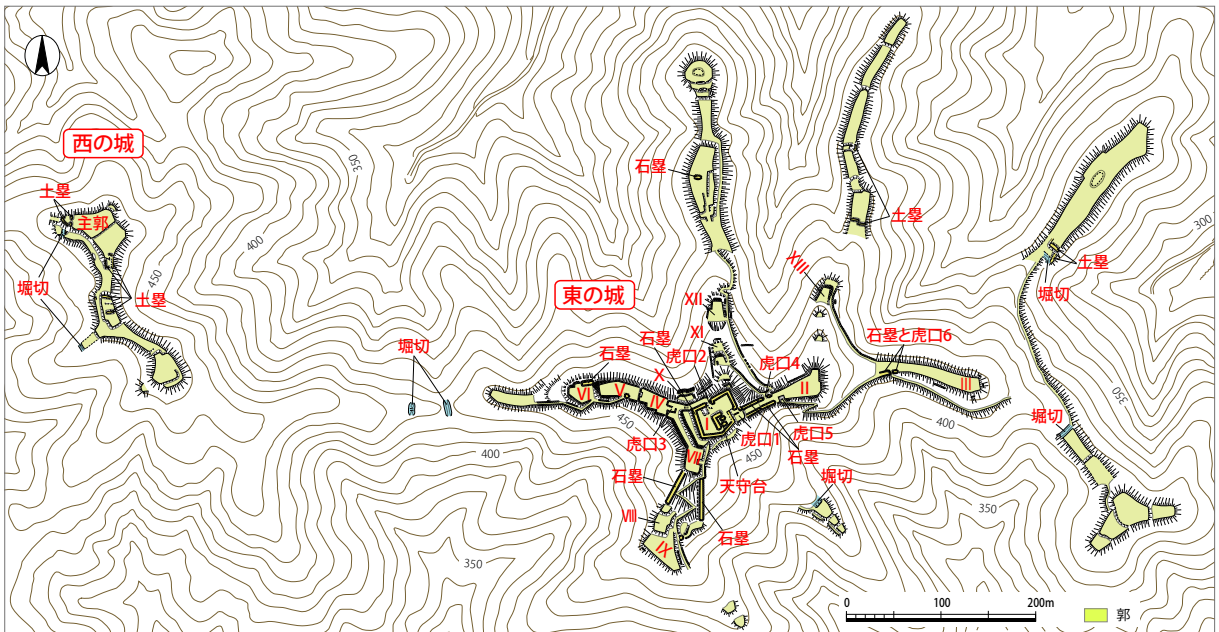


図2 周山城跡縄張図 (福島克彦氏作図を修正)

はじめに 平成29年、京都市右京区京北<sup>しゅうざん</sup>周山町に所在する明智光秀が築城したと伝わる周山城跡の詳細分布調査を行ないました。この城は弓削川<sup>ゆげ</sup>と上桂川<sup>かみかづら</sup>との合流点の西側、標高509.4mの黒尾山に

至る丘陵尾根上に展開する石垣を多用した山城です。周山城の所在する丘陵部は樹木が生い茂っており、通常の測量では地形の把握が困難であることから、樹木の葉の隙間から地盤に到達して地形計測

することの可能な航空レーザー測量を選択しました(図1)。

**周山城の歴史** 周山城の使用時期の文献は非常に少なく、津田宗及<sup>そう</sup>が明智光秀に招かれて天正9年<sup>きゅう</sup>(1581)8月14日に月見をした記録

『津田宗及茶湯日記』と、京の吉田神社の神職である吉田兼見の日記、『兼見卿記』天正12年2月4日条に「今朝築州（羽柴秀吉）、丹州シヲ山ノ城へ下向云々」という記述があり、丹州（丹波）のシヲ山ノ城（周山城）に秀吉が向かったことがわかる程度です。

江戸時代初期の記録で比較的信用度の高い江村専齋の『老人雑話』に、「明智亀山の北愛宕山につゞきたる山に城郭を構ふ この山を周山と號す。自らを周の武王に比し、信長を殷紂に比す。これ謀叛の宿志なり」とあり、周山城の名前の由来が、中国の殷周革命になぞらえて語られています。

明智光秀は、天正3年に織田信長の命を受け、丹波攻略を始めます。しかし、丹波八上城主の波多野秀治の裏切りにより赤井直正（荻野直正）のこもる黒井城（兵庫県丹波市）の攻略に失敗するなど、丹波攻略には時間を要しました。当時、反信長勢力として京北地域には土岐氏の流れをくむ宇津氏が勢力を張っていました。宇津氏は「宇津構（宇津城）を有して抵抗するなどし、宇津構の攻略は八上城

の陥落（天正7年6月1日）後の7月19日でした。光秀は宇津城の改築を手掛けている一方で、天正9年頃に周山城を築城したと考えられています。周山城は、光秀が天正10年6月13日の山崎の合戦で敗れた後も、豊臣秀吉とその配下の武将達により天正12年頃まで使用されたと考えられています。

**周山城の特徴** 周山城跡は、織豊（織田・豊臣時代）系城郭のなかでも特筆すべき城です。標高250m付近にある「周山」集落の西方にあり、二つの大きな区画に分かれています（図2）。

一つは、標高480.7mの城山を中心とする東の城であり、もう一つは標高482.1m付近の主郭を中心とする西の城です。両者は標高428.2m付近にある2本の堀切を挟んで東西に分布しています。

東の城は、天守台を含む総石垣の本丸（廓Ⅰ）を中心に、「城山」から8方向に伸びる支尾根の全てに郭が築かれており、東西約800m、南北約700mの規模があります。天守台は三つの土段で構成され、土段の間が穴蔵となる形式であった可能性があります。

西側の廓Ⅳから本丸に登城するには2箇所（虎口2・3）を通らなければなりません。東側の支尾根（廓Ⅱ）から本丸に登城するにも横矢掛（敵兵が上ってきたときに、側面から弓矢や鉄砲を放つため）の石塁をもつ虎口（虎口1）を通らなければなりません。初川家所蔵の「周山城図」で小姓郭と呼ばれているV区・VI区の北側に残る石垣の残りは非常によく、明智光秀の築城技術を観察することができます（写真1）。

一方、西の城は、東西約230m、南北約140mの広がりを持ち、尾根上を平らにし、土塁と堀切で守られた土の城です。

この周山城は、京都の城郭史上で非常に重要な位置を占めています。まず、織田信長が足利義昭のために築いた「武家御城（旧二条城跡）」の築城技術と、豊臣秀吉の築城した「聚楽第跡」の築城技術の間を埋める城であるといえます。存続期間が非常に短いことも時代の画期として重要な意味を持ちます。さらに、宇津城跡と比較すると、天下布武を目指す織田信長の有力な武将であった光秀は桁違いの築城技術と、人夫動員能力を有していたことがわかります。

周山城は光秀による丹波支配の拠点の一つで、若狭と京を結ぶ周山街道を抑える地点に築られました。見渡す限り山ばかりの地での城造りは困難を極めたはずで、福知山城・亀山城・周山城を築城した光秀の卓越した能力がうかがえます。

（京都市文化財保護課 馬瀬智光）



写真1 東の城 廓Ⅴ北面石垣（北から）